令和4年度 戦争にまつわる体験談

「うばわれた小さな命」

植田 康子さん（83歳）

1945年8月15日は敗戦記念日、あれから77年になります。私は、そのころ満州といっていた中国の東北部・大連で生まれました。

当時6歳、国民学校(※小学校)の1年生でした。とはいっても入学式に出ただけで学校は一度も行けませんでした。大連の街にも空襲があったのです。爆弾の落ちた大きな穴を見ました。敗戦間近のころには、父を残し屋根のない貨車で、朝鮮との国境の田舎へ疎開しました。

大連は、 ロシア人の造ったアカシア並木の美しい港町で、日本へ一番近い街でした。敗戦の時、私の家族は幸いなことに皆そろっていました。ソ連へ連行されるところを間一髪、逃げ出した父40歳。30歳の母、8歳の兄、6歳の私、4歳の弟、2歳の妹の6人家族です。

敗戦の報と同時に、中国の人々が私たちの物を盗ったり、家の略奪を始めました。国の後ろ盾を失った日本人は、命や財産を失いました。当時の日本政府は「居留民はできうる限り現地に定着の方針を取る」と発表したと後で知りました。私たちは国に見捨てられ、難民になっていたのです。

それから1年後、やっと日本に引き揚げることになりました。父のリュックと兄の小さなリュックとわずかなお金が家族の全財産でした。母は赤ちゃんの妹泰子を背負い私の手を引いて、 コロ島(※中国遼寧省) から貨物船に乗り、長崎県佐世保港へ向かうことになりました。

船底にはたくさんの人がひしめきあっていました。毎日、コーリャン(※中国東北部などで多く栽培されるモロコシの一種)のおかゆを食べました。母のお乳は出なくなり、妹のかわいい笑顔が見られなくなりました。ふつうなら4日ほどで着くのですが、燃料がないのか結局、佐世保上陸までに1か月以上かかりました。

日本の島影が見えるのに沖合で待つのです。夏の暑い日で、船底は暑くてたまりません。船からおろした錨(いかり)の鎖を伝って海で泳いでいたおじさんがおぼれて亡くなるという騒ぎもありました。大人たちは「やっと苦労して日本まで帰ってきたのに」と気の毒がっていました。

ようやく上陸しましたが、今度は引揚者収容所でまた足止めされました。発疹チフスが発生したのです。感染が収まるまで体育館のようなところで生活しました。イモのツルが入ったおじやが出ました。そのころ妹の泰子ちゃんはやせ細って大きなおなかをして、ぐったりと目を閉じたままです。そしてついに、母が恐れていた別れの時がきました。母は泣き叫び病人のようになり、毎日ぼんやりしていました。

私は二人の娘の母になりました。折にふれ「泰子ちゃんは風呂敷に包まれて逝った」とつぶやく母の気持ちを思いやりました。